

2つの「ショック」が 示唆したこと

執行役員総合企画センター長

三浦智康



100年に一度という「リーマン・ショック」。全治3年ともいわれたその傷が癒えかけたところへ、今度は1000年に一度という「3・11ショック」。どちらのショックも、「想像力」を働かせないと発生時には初動ミスとなり、「創造力」を働かせないと復旧時には無策とされた。そしてこの2つのショックが教えてくれたのは、危機管理上、3つの欠陥があるということである。

1点目は、ハイテクの影で薄くなるローテクを軽視しているということである。2つのショックは、金融工学と原子力工学というハイテクが騒ぎの中心にあった。リーマン・ショック時には「デリバティブ（金融派生商品）、CDS（クレジット・デフォルト・スワップ）、流動性危機」、進行中の福島第一原子力発電所の事故では「シーベルト、ベント、半減期」という専門用語が飛び交い、先行きはなお不透明である。リーマン・ショックで大半の金融取引が見合わされ、3・11ショックでは生活者が買い占めに走ったように、われわれはハイテクにいとも簡単に翻弄される。しかし、驚きだったのは、どちらのショックも、引き起こした張本人はローテクだったということである。

たとえば、リーマン・ショックのトリガーは、誤解を恐れずにいえば、詐欺まがいの契約行為である。信用力が低い無理な融資を粗製乱造してその信用保証を対価に手数料を稼ぎ、次にその契約を束ねて証券化し転売する——法的に違反ではないのであろうが、高い信用リスクをローンダリング（洗浄）して他に転嫁するという確信犯的な行為である。金

融工学というよりは、企みに近い。

3・11ショックの場合、当初は放射線もれやメルトダウン（炉心溶融）が不安視され、放射性物質の抑え込み一色だった。しかし、これも「バックアップ電源」が確保されていれば、事態は悪化しなかった。電源を保全するのは原子力工学の役割の中心ではない。

ハイテクの心臓部なら保全に相応のコストをかけるが、周辺にあるローテク部分はいち手薄になる。金融、エネルギー、バイオなど急速に進歩する分野は、心臓部と切り離してローテク部分の安全性を点検することが肝要である。

2点目は、世界のつながりにわれわれは疎かったということである。ショックが起きるたびに、想定外の負の連鎖が多数起きた。リーマン・ショックの当初、発端が米国の住宅ローンの焦げつきということで、日本への影響は軽微と見られた。米国の金融機関に救済融資を表明する本邦銀行があったほどである。日本政府からは「蚊に刺された程度」という趣旨の発言も出た。しかし、デリバティブというからくり商品は世界の金融界と産業界をつなげていて、日本経済を難局に、また信用力の低い国をデフォルト（債務不履行）の危機に追いやった。

3・11ショック後の4月半ば、北米トヨタの14工場のうち13工場が操業停止との報道があった。東北の自動車部品工場が停止して自動車がつくれない。新興国でも工場の稼働率が低下し、雇用問題に波及した。各国のエネルギー政策は見直しの気運にある。100を超える国から多額の義援金が日本に寄せられた

が、恩を仇で返すような負の連鎖が今も進行中である。

今後、世界のつながりを分解能を上げて分析しても、影響度を測るシミュレーターを作るのは無理だろう。むしろ、衝撃のクッションとなるロバスト（強靱）な系を整備することが先決である。

3点目は、回復プログラムを創造的にデザインする方法が見当たらないことである。リーマン・ショックは全治3年で、回復時には全く違うパラダイムの経済、産業構造になるといわれた。3・11ショックでも創造的復興が謳われている。しかし、「創造的」というのは、言うは易し行うは難しである。そもそも創造的仕事は、創造的な人にしかできないし、創造的な人材は簡単には確保できない。では、やり方はあるのか。

今、「フューチャーセンター（FC）」という枠組みが、北欧を中心に世界で広がっている。異能人材を混ぜ合わせて化学反応を誘発し、創造的活動を引き出そうというものである。ただ、価値観の異なる異能人材は、話が簡単にはかみ合わない。たとえば、「セイド」に問題があるといえば、文科系は「制度」、理科系は「精度」と異なる事柄を想起するかもしれない。FCでは、価値観が異なる人材を同じ土俵に乗せ、問題解決に協働で取り組ませる手法を体系化している。

異能人材を集め「問題の設定」から始めて創造を生み出す。このような取り組みは、日本そして世界が難局を乗り越えるための有効な方法として、今後大いに期待できる。

（みうらともやす）